

帰郷小説としての「河霧」

——私論 国木田独歩(一)——

辻 橋 三 郎

(一)

『学問のすすめ』や『西国立志編』から読みとった立身出世の思想が、明治という変革期を生きた人びとにとって、その実現困難の故をもって、「故郷回帰」の幻想とセットになっていたことを指摘したのは前田愛氏であった（「立身出世主義の系譜」『近代読者の成立』へ有精堂所収、昭48・11）。その痕跡を、文部省唱歌で辿り、そのおしきせの「故郷」が、今日の国鉄の Discover Japan、帰省列車、商業資本による駅弁、民俗品販売等々の、公私からなるふるさと売買という現象と一線にあることを剔抉してみせたのが、松永伍一氏であった（『ふるさと考』へ講談社現代文庫収、昭50・6）。

ところが、そのような故郷意識が、早くも明治期に、帰郷小説の系列を作り出していた。すなわち、菊亭香水の「惨風悲雨世路日記」（明17、東京稗史出版社、筑摩書房明治文学全集2『明治開化期文学集(二)』所収）、宮崎湖処子の「帰省」（明23・6、民友社）、国木田独歩の「河霧」（明31・8、『国民之友』）、徳富蘆花の「思出の記」（明33・3、34・3、『国民新聞』）といった系列の小説である。

これらの作品をみて、誰しも直ぐに氣のつくことは、胡処子、独歩、蘆花の三人が、すべて民友社系の文学者であることだ。三人とも、一時期、民友社員であつたし、三作とも、民友社の発行、あるいは発行による雑誌、新聞に発表されたものであつた。ということは、歴史的社会的根拠は前田・松永氏の言葉通りであつたとしても、三作とも徳富蘇峰の思想の影響下の作品であつたと考えていいということにならうと思う。

蘇峰には、田舎紳士評價の思想のあることは周知の事実であるし、また、「故郷春色今如何」（明20・3『基督教新聞』）、「故郷」（明23・6『国民之友』）ともに『蘇峰文選』（民友社、大4・12）所収）という二文が、彼の故郷思想を最も端的に示している。

「余が交友天下に遍ねし、然れども未だ爾（故郷のこと——辻橋注）の如く能く余が平生を知るものあらず、爾は實に余が耐久の朋友なり。嗚呼余故郷に在るか、故郷余に在るか、是れ實在なるか、是れ幻像なるか、余は総て之を知らず。然れども唯た余は感ず。山あり、原あり、泉あり、家あり、樹あり、彼等数多の朋友余が傍に來りて余を慰むるか如きを感じるなり、嗚呼面白き哉。」

「然れども余をして此の如く、眷戀禁する能はざらしむる所以のものは何そや。只た余が生涯の一部分を、此の土に経過したるを以てなり、余が故郷なるを以てなり。蓋し懷旧の情固より然るなり。抑も懷旧の情は、人間感情の中に於て、最も無罪にして最も優美なるものなり。欲もなく、得もなく、彫琢も仮らず、修飾も須めず。」

「余は之を思ふ、人間若し懷旧の情なくんば、實に人間世界は乾燥無味にして、人間社会は名争利闘の活戰場たるに外ならざるべしと。」（以上「故郷春色今如何」）

要するに、蘇峰にとつての故郷は、懷旧の情緒を触発する媒体であり、従つてそれは利害を超越した、自然發生的な美意識の原点たるところに価値があるというのである。それ故、それは、実像とも虚像——但し虚像といつてもマイナスの意味ではないもの——とも分明しない永遠の友人という比喩がふさわしいものであつた。この趣旨は、三年後執

筆の「故郷」では、一層明白に定義されている。

「故郷は必ずしも客観的の土地に非ず、唯其人の心に忘れんと欲して忘る、能はざる最初の感觸の剗刻せられたる處、之を故郷と云ふのみ。」

「故郷は則ち過去の記憶と想像とを以て、建立したる神聖なる殿堂なり。」

「故郷は一種のインスピレーションなり、琴線一たひ此に触れば、無限の妙音を発す。」

さらに、日本人のみならず西洋人においても、

「彼等は得意の時のみ故郷を求めざるなり、失意の時にも求むるなり。（中略）彼等は故郷より好遇せらる、か爲に故郷を愛するに非ず、虐待せらる、も尚故郷を愛するなり。」

即ち、故郷とは、一時的と恒久的とを問わず、いわゆる錦を飾る立身出世の思想の具体的実感の場のみならず、敗北の美意識実感の場としても愛慕されるというのである。明治二〇年二月、二五歳にして『国民之友』を創刊した、新進氣鋭のジャーナリスト、蘇峰という勝者の、勝者なるが故の粗大の言であるが、情緒のエネルギーは確実に指示した表現であった。そこには、たしかに民友社に集まっていた前記帰郷小説をものした青年文学者たちに強くアピールするものがあり、彼らがその文学化を意図したのもまことに宜なるかなというべきであった。湖処子と蘆花は、立身出世とはいえなくても為すある者の帰郷を描いて、その甘美な感傷は、蘇峰の故郷感のすぐれた具象化として、洛陽の紙価を高めたことは周知の事実である。独歩の「河霧」は、敗者の帰郷が描かれており、短編ながら、その内蔵する哀感に基づく芸術性は、前二者の作品にも劣らないと筆者は思う。しかし、この作品における独歩の故郷認識は、蘇峰の故郷美学の虚妄性を否定したものであった。それは、松永氏のきめこまかい鋭い分析による否定に先駆した、それであった。以下、そのことについて、細説してみたいと思う。

(二)

伊藤整氏は、その膨大な著書『日本文壇史』（『群像』連載昭27・1〜44・6、単行本講談社）のなかで、独歩を論じた随所において、独歩の小説構成の拙劣さ、小説技巧のまずさを叙説しつつ、しかし、人生の意味追求という問題意識（同書九卷、昭46・1）、あるいは、その認識の美しさ（同書一〇卷、昭46・4）の故に、世に評価されてきたのだと縷述している。「河霧」の場合、笹淵友一氏は、「一杯の水を求めるほどの気もなくなつた」主人公上田豊吉が、自殺を意志して、河舟の纜をとりて、河の中流に漕ぎ出て行くといった風の技巧的矛盾その他を指摘しておられる（『文学界とその時代』下巻〈明治書院〉昭35・3）。「河霧」における笹淵氏の精密な読みは正しいが、独歩の小説技巧が伊藤氏のいうように稚拙であるとはいいい過ぎではなからうか。伊藤氏自身も書いているように、独歩は即興的に書かれた作品を好み（『日本文壇史』一二卷、昭46・8）、自身、そのような作品を多く制作し、そのなかに佳作が多いのが事実である。「河霧」における笹淵氏の批評も、その即興的創作過程から生まれた瑕瑾といつていいものとみていいのではなからうか。そして、むしろ、小説技巧の面では、近代文学者中でも無比の技巧家といわれる芥川龍之介が記しているように、すぐれた技術の持主であつたといつてよからうと筆者は思う。

「国木田独歩は才人だつた。彼の上に与へられる『無器用』と云ふ言葉は當つてゐない。独歩の作品はどれをとつて見ても、決して無器用に出来上つてゐない。」（芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な」（『改造』、昭2・2〜7）
もつとも、齒に衣着せぬ評論家正宗白鳥には、次のような言葉がある。

「著者の叙述の方法も文章も不器用だ。思つたまゝを写さずして、それを一生懸命に廻り遠く、勿体ぶつて書いた、感じもしないのに、やれ空がどうであつたの、月がどうしたのと、泣いたとか笑つたとか、見えすいた虚言をつくの絶好の美文として見れば、著者の文章は露骨で不整頓であるが、吾人には其の思想を最短距離の文字によりて

写つしたのがうれしい。」（『独歩集を読む』『読売新聞』明38・8、新潮社版全集第六卷所収）

これを読むと、一応、無器用説が肯定されつつも、「思想を最短距離」で表現しているところを評価しているところは、無器用の器用という才能評価と読みとつていいものであらうと思う。

さて、そうした無器用の器用という文才の持主たる独歩の「河霧」の構造はどうなっていたか。主人公上田豊吉は、「故郷の朋友親籍兄弟」に祝福されて、前途に「大なる事業」という夢を思い描き、立身出世を目標として郷関を出た。その時、「杉の杜のひげ」というニックネームをつけられている、旧士族で世外の人たる並木善兵衛のみ、その都会における敗北と帰郷とを予言し、そして、事実、豊吉は、佗びしく敗残の身を故郷にさらさざるを得なかった、という悲惨な生涯のデッサンを冒頭におき、そのあと、豊吉の故郷における敗残の余生とその後を描き、その敗残、自滅の痛ましさを、悲しさが詩情豊かに物語られているのである。即ち、豊吉の生涯が二度語られるという形式になっている。その二回目において、故郷における敗残の余生と永遠の失踪という、第一回の粗描に欠落していた部分が展開されているのである。換言すれば、この構成は、第一度目のデッサンが二度目のメインストーリーの伏線になっているということである。そこで、こうした手法を映画用語を借りて説明してみると、生涯の素描と余生の細密画との二重露出（D.E. 即ち double exposure）といい得る方法がとられているといえようかと思う。もちろん、当時、映画などあり得た訳でないで、こうした方法は、まさに、才人たる独歩の創造とみていいのではないかとも思う。

さて独歩は、そうした方法によって作品を展開させるに際して、「杉の杜のひげ」の「取逃がした予言の一つ」として、「幾百年の間、人間の運命を眺めてゐた『杉の杜』のみは予め知つてゐたに違ひない」（傍点筆者）という表現に托しているのである。筆者はこのような方法の駆使を通して、独歩の巧妙な技巧を見出さずにはおられないのである。

(三)

それでは、「杉の杜のひげ」こと、並木善太郎とは、どのような人物であろうか。先ず、彼は「髭髯が雪のやうに白い」「小さい穢ならしい老人」で、「七十若干」の「頗る強壯なこつ／＼した体格」の持主である。次に、「其小さな丸い眼を杉の杜の薄暗い蔭でピカ／＼輝かせて、黙つて立つてゐるのを見ると誰も薄気味悪く」思うのだった。さらに、「若い時分から口が悪く」、「右左を間違へて言ふ仲間の一人」で、年とともに「余計口が悪くな」り、人の死さえも「平気」で「予言」し、「それが又奇妙に適當」つたという。そうしたことから、一層の自信と興味をもつて、人の運命に関心をもち始め、「熟練」の段階に達していたといふのである。しかし、独歩は、この人物の説明の最後に、次のようにつけ加えている。「彼は決して卜者ではなかつた。」

それは、彼が、豊吉の性格について、次のように解剖分析する能力を具備していることを示すためであつた。

「豊吉は善人である。又た才もある。しかし根がない、いや根も随分あるが、どこか影の薄いやうな気味があつて、其為る事が物の急所に当らない。又た力一杯に打込んだ棒の音が鈍く、反響するといふやうな処がある。」

つまり、「杉の杜のひげ」は、体格はいいが薄汚い、目の異様に光る、しかし、性格分析の知力、鋭い直観能力にたけた、七〇余歳の没落士族の一人であつたといふのである。

この「杉の杜のひげ」といふ老人には桑原治三兵衛というモデルがあることが、二人の郷土研究家によつて報告されている。しかし、それが同一人物であるのに、外貌の点はともかく、性格的には正反對な人物として報告されているのが面白い。即ち、桑原伸一氏（『国木田独歩―山口時代の研究』〈笠間書房〉昭47・5）によると白いひげをはやした温厚篤実な文筆家であつたとのこと、ところが、谷林博氏（『青年時代の国木田独歩』〈柳井市立図書館〉昭47・5）によると、独歩の描く老人に近い、気味悪い面貌の、一種の神がかり的性格と正義派的側面との所有者として紹

介されている。筆者には所見の当否よりも、桑原説からすると、甚しくデフォルメされた人物が、何故、独歩によって創造されたかという点に、問題が見出されるのである。

笹淵氏は、老人によってなされた豊吉の性格解剖の言葉に、「欺かざるの記」の次の表現に通ずるところがあるとされている。

「人生の悲惨は多くキヤラクターの結果なり。（中略）キヤクターは遺伝なり。故に悲惨は遺伝より来るてふゾラの説は真理なるが如し。」（明29・9・15）

そこで、笹淵氏は、老人について、「その神秘的、伝奇的な印象に反して、その内容は一個の自然主義者であり、欺かざるの記」の末期に独歩が示した傾向の矛盾をそのまま具象化した人物」であるとされている。筆者も同意見で、ここには「河霧」執筆時の独歩の目―明治二〇年の初上京以後、種々の人生遍歴を重ね、最後に佐々城信子への失恋という大打撃を受けた揚句培われた、独歩の冷厳な現実凝実の目を見出すのである。この老人は独歩自身の分身という実質を与えられていたという訳になるのである。そうした独歩の分身という役割をもつ老人に、神秘的伝奇的な印象を与えたことは、作品世界の写実的気分を稀薄にするための技術であつたろうと思われる。

さて、作品の中で、この老人の豊吉の性格分析、運命の予言はまた、作品の展開、結末の伏線の機能を担っていた。しかも、独歩は、作品中で、そのことを、二度も明言しているのである。一度目は、前述した。二度目は、敗残者豊吉の帰郷後の無為平和な毎日の描写と、私塾設立を承諾した後の叙述である。

「『杉の杜の髭』の予言の中つたのは此処まで、ある。さて此以後が『髭』の予言し遺した豊吉の運命である」。（傍点筆者）

以上のように、伏線を明示しつつ、しかもそこで、二度とも、豊吉の「運命」に関心を抱いている作者の志向を示していることは、技巧を露出させながら、その技巧が、読者の心理に障害になるよりも、その期待感を、より一層か

きたてる効果を發揮している。こうした技巧をこそ、まさに、無器用の器用の真髓といわれていいものと筆者は思うのであるがどうであらうか。

(四)

豊吉についてはモデルはないと、一郷土研究家はいっておられる（谷林博氏、前掲書）。しかし、「杉の杜」がもと国木田家の借りていた借家近くにあること、兄たちの尽力で豊吉が私塾を開設しようとする建物、「片山といふ家の道場」とあるのは独歩の小学校時代の友人である一年以上級の片山武助の家であること、「此家の少年を餓鬼大将として荒れ廻つた」とあるのは独歩の少年時代が、ガリ亀、アカ猿というニツクネームをつけられた程、いたずら者であつたこと、また、豊吉が帰郷後、魚を釣っている少年に注目した場所の風景描写、「川柳は日の光に其長い青葉をきらめかして、風のそよぐ毎に黒い影と入り乱れてゐる。（中略）小川の水上の柳の上を遠く城山の石垣の類れたのが見える。」とあるところは、まさに錦帯橋周辺の描写であること、結末近くの、豊吉が消えて行こうとする大川が岩国の錦川であり、河霧が錦川の名物であることなど、事実の断片が随所にばらまかれていることを郷土研究家桑原伸一氏は指摘しておられる。また独歩が釣好きであつたことも、母の自ら語っているところである（国木田まさ子「嗚呼国木田独歩―父母の膝下における独歩」『中央公論』明41・8、全集一〇巻所収）。さらに私塾開設という発想自体、独歩の波野英学塾開設体験に基いているといえよう。このように、独歩の生活経験が、背景に、点描にとり入れられているとすれば、これだけでも、この豊吉という主人公が、独歩の分身ではないかという類推の手がかりは与えられているといえそうである。

ここで、目を独歩の生涯に転じてみよう。独歩は明治二十四年三月、東京専門学校を中退、五月、山口県の両親の許に帰省している。そして、その年の一〇月、波野英学塾（山口県能毛郡田布施村毛谷）を開設している。大望を抱い

て上京、東京専門学校に入学したものの、ストライキ参加によって中途退学、帰省を余儀なくされたことは、青年独歩に、自らを敗北者、敗残者と実感させたことはたしかである。また、その後、「河霧」執筆時までの人生行路においても、佐々城信子への失恋を頂点として、自らの生の軌跡のなかに、敗北の歴史を否応なしに確認させられていたこともたしかである。もともと、敗北者、敗残者という人間像は、独歩の私淑していたワーズワースからも学びとっていた筈であり、さらにまた、それは、日本文学における伝統的な美的人間像でもあった。⁽¹⁾つまり、独歩は自らの敗北体験に、ワーズワース的、伝統的敗北者像をも重ね合わせて、独歩自身の分身としての豊吉という人間像を創造したのではないかと思われるのである。それに、前述したように、独歩の山口における生活の諸断片が応用されていたとすれば、それらは、そのことを一層確実に裏づけるものといっているのではないかと思う。

とすると、この作品は、独歩の分身の目をもって独歩の分身の性格、運命を予言した作品、もつと端的に言えば、独歩自身の目で、独歩自身を描いた文学、即ち、自己客観視の文学、自己反省の文学ということが、この作品の構造ということになるように思われるのである。

さて、独歩の分身、その一つの可能性の具体化と目される豊吉の性格を、「杉の杜のひげ」の分析に従って点検してみよう。「ひげ」の豊吉観を、個条書き風に整理してみると、(1)善人である、(2)才能がある、(3)根気もないことはない、(4)人情味がある、(5)小心である、(6)何となく影が薄い、即ち、生命力の稀薄な感じがする、(7)することが「物の急所」を外れている、即ち、要領の悪い行動をする、というようなことになると思う。

作品では、こうした諸要素をもった豊吉は、「失敗」「成功」の繰返しを経て、「零落」はしたが、酒に沈湎することもなく、帰郷して来ているのである。こうした人間像に、片岡良一氏は、典型的な真面目な没落士族の子弟の性格と運命をみておられる(『近代日本の小説』〈法政大学出版局〉昭31・6)。実利主義、合理主義を実質とした資本主義国家としての形成途上にあった明治日本では、没落士族の一子弟にとって、自主的独立人の気魄はもっている

も、「大なる事業」は、具体的個性的なイメージを描き得ず、したがって、目的実現の方法の欠落という結果がもたらされたのは当然であつた。しかも、士族出身のインテリという自尊心は、アルコール中毒者としての放浪者、肉体労働者としての再出発も不可能にした、それが豊吉であつたといふのである。こうみえてくると、ここでも、「河霧」執筆時までに種々の目的を設定企画し、その幾つかは実行に踏み出したものの、挫折に次ぐ挫折の歴史であつた独歩の性格と生活体験とが、誰しも彷彿として浮びあがつてくるであらうと思う。（山田博光氏は、片岡懋氏が「独歩ノート——河霧について」へ『国語と国文学』、昭23・9において、豊吉を没落士族出身と規定されているのに対して、作品中、豊吉が没落士族云々という記事は全くないとして批判的である。『独歩「河霧」論』日本文学研究資料叢書『自然主義文学』所収『有精堂』、昭50・8）しかし、豊吉が帰つたところが士族屋敷であること、都の陋巷に沈溺することを潔しとしない廉恥心の持主であること、また、兄の子供に「漢学の素読、数学英語」を教え得る学力をもっているところなどから、彼を没落士族出身とすることは、誤っていないと筆者は思う。

要するに、主人公上田豊吉論は、何時知らず独歩論になつてしまふこの豊吉の、帰郷後の行跡を、以下作品にそつて辿つてみたいと思う。

(五)

「汗じみて色の変つた縮布の洋服を着て脚絆の紺も褪せ草鞋もぼろ／＼」になつた「年の頃は四十ばかり、胡麻白頭の色の黒い頬のこけた面長な男」即ち、上田豊吉が見出した故郷の町並は、「随分變つてゐた」。しかし、士族屋敷は、變つたやうで變つていなかった。それよりも變化のなかつたのは、豊吉の兄の子供たちの遊び廻っている大自然であつた。釣竿を持った少年の姿を豊吉は見出した。「豊吉はわれ知らず其後について、ちつと少年の後影を見ながらゆく、其距離は数十歩である。実に三十年の歳月であつた。豊吉は昔の我を眼の前にあり／＼と見た。」「大川の支

流の此小川の此処は昔から少年の釣場である。豊吉は柳の蔭に腰掛けて久しぶりに其影を昔の流に映した。小川の流は此処に来て急に幅廣くなつて、深くなつて静かになつて暗くなつて居る。「川柳は日の光に其長い青葉をきらめかして、風のそよぐ毎に黒い影が入り乱れてゐる。其冷やかな蔭の水際に一人の丸く肥ツた少年が釣を垂れて深い清い湖の水面を余念なく見てゐる。其少年を少し隔れて柳の株に腰かけて、一人の旅人、零落と疲労を其衣服と容貌に示し、夢みる如きまなざしをして少年を眺めてゐる。小川の水上の柳の上を遠く城山の石垣の頽れたのが見える。秋の初で、空気は十分に澄むでゐる、日の光は十分に鮮かである。画だ！意味の深い画である。」

自分と子供たちをすっかりのみこんだ昔そっくりの大自然、人間を必須の構成因子の一つとした大自然、これが、豊吉を、最初に迎えた故郷であつた。この人間が自然に溶解している画のような故郷の大自然が豊吉歓迎の最初の世界であつたことは、この作品の結末を暗示している。独歩が「意味の深い画」とした所以である。

故郷の人びとも、敗残者豊吉を、心暖かくうけいれた。即ち、人びとは、豊吉の老衰、無事、零落を、驚愕と祝福と同情とをもつて、「見舞」に來た。一方、「氣の弱い」豊吉は、思いがけない、なみなみならぬ人びとの温情に、驚き、泣き、かつ、安堵感から一層老化した。特に豊吉の兄一家は、あげて彼を迎え入れた。兄の心尽しはいうまでもなく、その子供、一五才のお花、長男の源造、次男の勇は、豊吉を「慰め」、豊吉と「遊び」、豊吉に「あまえた」。

「豊吉はお花が土蔵の前の石段に腰掛けて唱ふ唱歌をききながら茶室の窓に倚か、つて居眠り、源造に誘はれて釣に出かけて居眠り乍ら釣り、勇の馬になつて、のそ／＼と座敷を這ひ廻り、馬の嘶き声を所望されて、牛の鳴く真似と間違て勇に怒られ、家中を笑はせた。」

やがて、故郷の人びとは、豊吉が兄の子供に「漢書の素読、数学英語の初歩」を教授していたことから着想して、私塾の開設を計画した。これは豊吉自身のためにも、人びとのためにもなるといふ、故郷の人びとの善意に基いてゐた。そのことを、無為寄食の苦痛から免れるものとして、豊吉も、ひそかな歡びをもつて「同意」した。このように、

豊吉の異郷での敗北は、故郷での平和を購ったようなものであった。

しかし、一月もすると、目標のない「今日の安息無事」よりも、過去の、目標のあった「煩悶」苦痛の日々が、故郷の人びとの好意「親切」――愛に支えられていたら成功もあり得たのではないか、という愚痴めいた気持を伴って、懐かしく回想されてきた。

さて、独歩は、ここで、前述したように、次のように記している。

『杉の杜の髭』の予言の中つたのは此処まで、ある。さて此以後が『髭』の予言し遺した豊吉の運命である。』

独歩は、この作品を、豊吉の運命劇であるという印象を読者に与えようと懸命になっているように思われる。果して、この作品は、単純な一人の人間の運命劇なのであろうか。

(六)

さて、主人公の豊吉は、私塾開校の前夜、大川の「河霧」の彼方に消えていったのであった。折角、豊吉のために、豊吉に生甲斐を与えるべく、新しい職場が用意されたのに、何故、豊吉は、永遠の失踪という道を選んだのであろうか。

最もすぐれた独歩論といわれる中島健蔵の「国木田独歩論」（明治文学全集66『国木田独歩集』〈筑摩書房〉昭和49・8）の中に、次のような表現がある。

「いわゆる『郷土』を持たないということが、独歩の性格に、かなり深い影響をおよぼしていると思われる。」

筆者は、そのことが、独歩の作品にも、深刻な影響を残していることを強調したいのである。その典型的作品がこの「河霧」なのである。ということは、独歩文学の多くの素材と舞台となっている山口は、独歩の本来の故郷ではなかったという事実である。周知のように独歩の父専八の故郷は、もともと、兵庫県竜野であった。明治九年二月、専

八は山口裁判所勤務となり、それから、山口県各地の裁判所を転々し、同二六年一〇月退職、二七年一月、妻と共に上京して独歩宅に同居するまで山口に在住した。その間、一九年一〇月、本籍を龍野から山口県阿武郡萩瓦町二八番地屋敷に移している。この両親の山口在住中に、独歩は少青年時代を送ったのである。したがって、山口は、独歩にとって第二の故郷とはいえても、祖先から土着し、みずからが生成成長したという、一般的な故郷の定義に該当する場所ではなかった。ということとは、山口土着の人びとからみると、独歩は、あくまでよそ者であった。

波野英学塾を閉鎖した後に記されたものと思われるが、水谷真熊宛の書簡に次のような表現がある。

「僕此頃頻りに上京致し度く相成り候、周囲の事條ハ実に僕をして益々此の情を強め候ト申すは他なし此度都合有之柳井津町と申す小都会に転居致さるを得ざる様立ち至り候最早や静肅なる山林の間に勉学致す能はず、つまり東京と比較して不便利なる丈此の方が損に相なり候事之れ第一の理由」(明25・5・2、全集五卷所収)

ここには、波野英学塾の教育方針——「現実の諸問題の打破、自由、平等を尊重するキリスト教精神を基盤とした平民主義思想」が「危険思想」として村民(山口県熊毛郡田布施村)に曲解された事実(桑原伸一前掲書)を、先ず読みとることができる。その他、「帰去来」の素材となった土地(当時、山口県熊毛郡麻里布村)の素封家、石崎松兵衛の次女、石崎とみに求婚して拒絶された心の傷や、その他、よそ者なるが故の、独歩の暗い諸経験を読みとっていいのではないかと思う。独歩の山口における第二の故郷体験は、同じ民友社系の宮崎湖処子が「帰省」で描いてみせた、甘美な故郷とは、似て非なるものがあつたのではなからうか。前掲の手紙を、筆者にそこでも深読みをさせるのは、行間から滲み出てくるニュアンスからであるが、「疲労」(明40・6『趣味』)という作品の中で、一人物に「故郷の奴等人に事を頼む時はわい／＼言つて騒ぐ癖に、その事が甘くゆくと見向きもしないんだ。人を馬鹿にしてやアがる。」と言わせているところなどにもよるのである。

真実、独歩の体験したのは、そのような第二の故郷山口でのいわば擬似故郷体験であつたにかかわらず、作品におい

て、すべての肉親、他人が心暖く豊吉を迎え入れたというストーリーとして展開させ得たことは、第二の故郷体験しかもたなかったが故の故郷憧憬からきた、理想化、美化、幻化であつたとみていいのではないかと思う。そうした理想化、美化、幻化のイメージ作りに与つて力のあつたのが前述した、蘇峰の故郷論であり、湖処子の「帰省」であつたと思われるのである。この作品のテーマは、結末の一行で完成されているが、しかし、文学作品というものは、作品展開の途上、いかに憧憬と理想とをもつて、美しい幻想空想、彩られた描写を繰り展げて、どこかに、本音が露頭をあらわすものなのだ。

豊吉は、彼を深々と抱擁する大自然と、善意、好意によつて、「見舞」配慮してくれる人びとの中にならながら、しかも、最終的に大川の「河霧」の彼方に消えていつてしまつたのである。独歩は、その理由を、次のように書いている。

「渠は自分^{かれ}を知らなかつた。自分の影がどんなに薄いかを知らなかつた。」

「実にさうである。豊吉の精根は枯れてゐたのである。渠は今、堪ゆ可からざる疲労を感じた。私塾の設立―渠は此言葉のうち、何等の弾力ある者を感じなくなつた。」

「たゞ渠は疲れ果てた。一杯の水を求めるほどの気もなくなつた。」

独歩はさまざまな表現をもつて、懸命になつて、豊吉を運命的に生命力のない人物としようとし、それ故の疲労無氣力が彼を死に追いやつたと、説明しているのである。しかし、その説得力の弱さが、笹淵氏の「『一杯の水を求めるほどの気もなくなつた』彼にわざわざ河舟の纜^{もろ}を解いて棹^{かじ}を立て中流に舟を出すという、『昔の河遊びの手練』を必要とする仕事ができただけの腑に落ちない。」「それはいうまでもなく自然死ではなくて自殺である。従つて生と死との間にある膜一重を破るためには、やはり意志の力が必要である。だが、『一杯の水を求めるほどの気もなくなつた』彼にそれだけの意志力がありえたか。」という批判を招いたのである（前掲書）。

それでは、豊吉を大川の彼方への永遠の失踪という自殺を敢行させたものは何であつたか。

「明日は開校式を行ふ筈で、豊吉自からも色々な準備をして、演説の草稿まで作つた。岩―の土族屋敷も此日は其ために多少の談話と笑声とを増し、日常淋しい杉の杜附近までが何となく平時と異てゐた。」「そこで其夜、豊吉は片山の道場へ明日の準備の爲のこりをかたづけに往つて、帰路、突然方向を変へて大川の辺へ出たのであつた。」「豊吉は大川の流を見下ろしてわが故郷の景色を暫時見とれてゐた、暫時してほとと嘆息した、さも／＼がっかりしたらしく。」「(傍点独歩)」

以上引用した文章に描写されている豊吉の行動のなかに、故郷の人々との間に違和感を味わつた果の、虚無感、絶望感を讀みとれないだろうか。やや多い「土族屋敷」にひびいた「多少の談話と笑声」が、「日常寂しい杉の杜附近」の寡困氣を「何となく」変化させていたというあたりに、故郷の人びとの豊吉への感情が、愛といった風のものではなく、憐憫、同情であることを直観していた豊吉の姿を、筆者は見出すのである。であればこそ、その夜、準備の「爲のこり」をにしに「片山の道場」に行き、「帰路」、「大川の辺」へ出、「がっかりした」らしく嘆息をついたのであろうと讀むのである。即ち、傍点は、ただ、読者の読み易さのためという、單なる便宜をはかつてのものではなく、独歩によって特殊な意味が与えられていたとも読解するのである。準備の「爲のこり」における傍点は、故郷の人びとは、半ば、義務感で行動していた結果を示すためのものであり、それを看取した豊吉は、故郷の人びとの心情のなかに、敗者へのほどこしとしての憐憫と同情とを敏感に感受して、「がっかり」したのではなからうか。「がっかり」に傍点が付けられているのも、豊吉の内部においては、それが致命的な意味をもっていたからと解釈するのである。(独歩文学における傍点が、特殊な意味も担わせられているところは数多い。)

ここで、前にもどつて、豊吉が、まだ、故郷の人びとの善意、好意に酔つていたところを、もう一度ふりかえつてみる。

「渠は思つた、他郷に出て失敗したのは強ち渠の罪ばかりではない、實に又た他郷の人の薄情きにも由るのである。

されば若し斯様な親切な故郷の人々の間に居て、事を企てなば、必ず多少の成功はあるべく、以前のやうな形なしの失敗は有るまいと。」

この回想は、故郷の人びとの好意、善意を、愛として感受—極端に言えば錯覚していた豊吉の心情を物語っている。換言すれば、愛の渴きを癒されたと思った時の愚痴的つぶやきともいえるものであった。独歩の分身としての豊吉であつてみれば、このような愛の渴きは必然であつた。であるのに、故郷の人びとの心底にあるものが、ほどこしとしての憐憫と同情とであることを感知した時、没落士族の子弟豊吉が最後に残された勇気をふるって、永遠の失踪へと決断「行動」に出たのは必然以外の何ものでもない。即ち、

「河舟の小さなのが岸に繋であつた。豊吉はこれに飛乗るや、纜を解て、棹を立た。昔の河遊びの手練が未だのこつて居て、舟はする／＼と河心に出た。」のである。

愛の錯覚が豊吉を永遠の出走に追いつめたということを確認させる表現こそ、結末の一句である。

「尤も悲だものはお花と源造であつた。」

キリスト教には、たとえば「汝ら幼子の如くならずば、天国に入るを得じ。」(マタイ一八の三)という言葉に象徴されているように、子供たちこそ、まったく愛を生きる理想的人間像であるという思想がある。したがって、この結末の一節は、少年少女だけが、豊吉を愛していたということを明言しているようなもので、独歩としては、これこそ、読者に最も語りかけたいことであつたのではないかと思う。独歩文学における少年物—「鹿狩」(『家庭雑誌』明31・8)、「春の鳥」(『女学世界』明37・3)等々は、少年たちの心の美しさを訴えて、しかもその芸術性は高い。要するに、「河霧」においても、少年少女のひたむきな愛情の描写で結ぶことで、本当の愛—キリスト教的——の不在が、人間悲劇をもたらすということ、これこそ独歩が心をこめて読者に語りかけたかった、この作品のテーマではなかつたかと筆者は読み解いているのであるが、どうであらうか。したがって、このような主題の提示は、本当の愛—キ

リスト教的な——など、いわゆる故郷に求めるべきではない、甘美な、無限抱擁的、母の故郷とは、所詮、人間の幻想幻覺に過ぎないという独歩の山口体験に基いた故郷認識による、当時、蘇峰、湖処子によって、作りあげられつつあった故郷観へのプロテストの意味がこめられていたという風に解読するのである。そうした、独歩独特の故郷観のみをそのまま、形象化するには、「河霧」執筆時の独歩は、余りに詩人であり過ぎた。それが、一見、運命悲劇という体裁を整えるべく、前述したような技術的配慮に腐心させたのであらうと思う。こうした側面の指摘が、笹淵氏の「浪漫的なものと写實的なものとが混り合つてゐる」という評語となつたのであらう。

そうした心くばりを、最終的に示しているのが、主人公豊吉の大自然の中への永遠の失踪を描いた結末近い文章である。

「遠く河すそを眺むれば、月の色の隈なきにつれて、河霧夢の如く淡く水面に浮でゐる。豊吉はこれを望んで棹を振つた。舟いよ／＼下れば河霧次第に遠かつて行く。流の末は間もなく海である。豊は遂に再び岸——に帰て来なかつた。」

大自然の中への人間の永遠の意志的行方不明、それは、大自然に貫流する生命への合流を願つてのことであらう。それは、自然への絶対帰依と換言できよう。すなわち、汎神論的志向の究極的行爲である。独歩の分身たる豊吉は、独歩の信仰の一側面たる汎神論的傾向を背負つて、河霧の彼方に消えていったのであつた。

そして、このラストシーンこそ、先に引用した、帰郷した豊吉が、二〇年ぶりに見た故郷の風物に感動している描写をしめくくっている言葉の「意味の深い画だ」の表現に照応し、その意味を解き明したものであつた。

さて、先にこの作品の構造について筆者は、「杉の杜の髭」という独歩の分身の目をもって、独歩の分身たる豊吉を見た、自己客観視の文学、自己反省の文学であるといった。そのことについても、独歩は、処置をつけるといふ細心の用意を払っているのである。

即ち、永遠の失踪の直前、豊吉は、村の墓場に行き「杉の杜の髭」即ち並木善兵衛の墓の前に赴かせているのだ。しかも、

「『髭』の墓に豊吉は腰をかけて月を仰だ。『髭』は今の豊吉を知らない。豊吉は昔の『髭』の予言を知らない。」

予言した者と予言された者とは、幽明境を異にしつつ同一場所にいる、という情景は、人生における運命の不可解さ、不思議さを読者の心理に深く刻印し、この作品を運命劇として読ませようという独歩の作為であろう。

しかし、これも、筆者流に、帰郷の文学として一読する時、共に故郷のもつ実像と虚像とを確認した者の再会としての意味をもつてくるのである。

即ち、この情景は故郷の虚像を咏嘆しつつ、そこに、人間の本質的孤独の相を黙認し合っている二人——実は独歩一人——の人間認識を塗りこめたものである。

以上のように掘り起していけばきりが無いのが、独歩文学の一般的傾向であるが、この「河霧」においては、特に、彼の内部に胎動している数多の問題意識が、ともすれば幾つとなく露頭を現わしては、作品の統一化が、阻害されているともいえるのである。そのような点から、笹渕氏の、「『河霧』は曖昧な不徹底な性格をもっている」（前掲書）という評語も導びき出されたのであらうと思われる。

(六)

要するに、「河霧」は、独歩の第二の故郷、山口体験から培養形成された、故郷観をもって、蘇峰、湖処子によって定型化されつつあった文学者の故郷観に、一矢を酬いた作品であった。

その根拠が、キリスト教思想にあったところに、筆者は、独歩の内部におけるキリスト教の浸潤度の濃密さを見出すのである。

冒頭に述べたように、明治期における帰郷文学は、立身出世主義思想とセットになった故郷意識に基いていた。その系列の文学が、不思議に民友社系、キリスト者系の文学者たちによるものであったことは面白いと思う。ということは、明治期においてキリスト教は、一応、開明の思想であり、立身出世主義思想を支える側面をもっていたのである。湖処子の「帰省」こそ、その事実を証明している。

そのなかで、独歩の帰郷小説の代表作ともいえるこの「河霧」が、運命悲劇という枠組のなかで、キリスト教思想をもって、故郷の虚妄性を鋭く剔抉しているところに、この作品の大きな意味を筆者は見出しているのである。

(1) 独歩が日本古典をも味読していたことは、佐々木信綱氏の指摘しているところである（『明治文学の片影』へ中央公論社〈昭9・10〉）。

(2) 独歩の少年観は、直接的にはワーズワースの思想に触発されたところが多かった。しかし、それは、独歩の思想の根底にキリスト教思想があつてのことであり、また、ワーズワースの思想もまた、キリスト教思想を原点としていた。したがって、小論においては、あえて、キリスト教的少年観に重点をおいて論述を進めた。ワーズワースの少年観については、次号に掲載予定の「春の鳥」論においてふれたいと思う。

(1、この一連の小論は評論風を加味して書き続けてみたい。「私論国木田独歩」とした所以である。2、独歩原文はすべて学習研究社版国木田独歩全集によった。）

Saburo Tsujihashi

Résumé

Kawagiri and the Theme of Homecoming

Personal Views on Kunikida Doppo I

Kawagiri (The River Mist) by Kunikida Doppo belongs to the group of the Meiji novels, characterized by their common theme of homecoming, including Miyazaki Koshiyoshi's *Kisei* (Homecoming) and Tokutomi Roka's *Omoidenoki* (The Recollections). The book has hitherto been interpreted as a tragedy of fate. It is my contention that it exposes the begniling appeals of home: man's yearnings for home which is after all a yearning for an illusion. I believe, therefore, that *Kawagiri* reveals a human tragedy resulting from lack of love in its true sense.